

# 東京多摩地区現代俳句協会

# 多摩のあめんばの

会報 No.157



## 俳句の両極～今私たちは何を考えるべきか～

黒岩 徳将

現代俳句協会青年部長の黒岩です。「俳句の両極」ということを考えていました。私たち協会員は百年先を見据えて俳句の世界を深く耕すために何をすべきでしょうか。私は、個々の俳人の凝縮された俳句観のぶつかり合いが大事で、そこに俳句の「両極」があると考えます。中村草田男、金子兜太、高柳重信はこれを実践しました。私も、誰かと「これ以上話しても無駄だ」と思うまで俳句価値観を交換したいです。

会誌「現代俳句」では特集「昭和百年／戦後八十年 今、現代俳句とは何か」を設けています。理事二十五人アンケート「2. 現代俳句の「現代」を時期として捉えると」に「平成以降」と回答したのは黒岩のみ。生まれていない時代の俳句を

「現代」と断じることは私にはできません。世界の自然・文化情勢が目まぐるしい勢いで変わり続けている中、俳句においても「変化」にできる限り注目したいと思います。二〇二五年角川「俳句」合評鼎談を一年間担当して感じたことは、若手とベテランの「詠み」と「読み」の価値観の断絶です。世代間交流によりこのギャップを少しでも顕在化させたり埋めたりしたく、その先にようやく平成・令和俳句の検証が進みだすのではないかと思います。しかし、俳句史に輝く昭和の名句を無視することもできません。「一句への肯定評と否定評の共存」の例を挙げてひとまず「熱」を感じ取ってみます。

角川「俳句」は平成時代に名句の検証特集を2回行っています。二〇〇六年二月号「本当に名句なのか?評価の分かれ有名句」、二〇一四年九月号大特集「これは名句なのか?」。二〇一四年の方が、評者同士の対立点が明確で面白く、一部紹介します。有名句に対し痛烈な批判は少なく、否定的意見の方が評者にさまざまな負荷(反例の顕在化、可能性の浮上など)がかかるためかと思います。

あめんばと雨とあめんばと雨と

藤田湘子『神楽』

多摩風土記 (鳥天狗道祖神)  
町田市成瀬地区の地蔵坂の横に道祖神が祀られている。鳥天狗の姿が彫られた像の左右には「奉建立道祖神 武州成瀬 東光寺村」と刻まれている。江戸時代中期の一七〇〇年代の作で。天狗型の道祖神は全国的にもめずらしく、成瀬地区にある他の二体とともに、二〇一二五年三月町田市教育委員会により町田市有形民俗文化財に登録された。  
(小山健介)

駒木根淳子は「最大の魅力はリズム感である。（中略）五感を存分に働かせ、極限まで単純化して即物的な表現のみまで徹した作品なのだ。（中略）聴覚にも訴えた平成作の名句にまちがいない」と述べています。今井聖は、表記の簡明さにおいて「さきみちてさくらあをざめるたるかな 野澤節子」と比較し、「平凡な景の中での二物、〈あをざめるたる〉のような見せ場がない。（中略）型は決まつたが内容が希薄。言うならば技法瘦せ」と言っています。駒木根と今井で異なるのは、この句（もしくは俳句全般）における、「技法の持つ感性への影響」をどうほど重要視しているかということです。

昭和の時代に賛否の意見が分かれた俳句を数句挙げます。

甘草の芽のとびとびのひとならび 高野素十「初鶴」

虚子は、「一見まことに古いやうに見えて、しかも千古を通じて新しいものがある。それは『まこと』である。動かすべからざる真である」「小規模だとか一本一草といつて捨て、しまふ人の心持は私からいへば甚だ残念なのである」（高濱虚子「秋櫻子と素十」、「ホトトギス」昭和三年十一月号）

この句の虚子評価に対し、秋櫻子が反駁文「自然の真」と『文藝上の真』を「馬酔木」昭和六年十月号に掲載。

秋櫻子は、「自然の真」の他に、何物の加へられたるありや『文芸上の真』とは、鉱にすぎない「自然の真」が、芸術家の頭の溶鉱炉の中で溶解され、然る後鍛錬され、加工されて、出来上がつたものを指す」と書いています。現在でも俳句を考えるときに素十（虚子）・秋櫻子どちらの価値観・方向性に賛成するか、は初学者の問い合わせとして「今後自分がどのような俳

句を作りたいか」を考えてもらうために有効です。

ただ、素十句に関しては後年になつて、高山れおな「この精妙な観察をトリビアリズムと決して思わない」（角川「俳句」二〇〇六二）四ツ谷龍の「同じものが「一定の時間を置いて」出現するさまを句にしたりしている」「自分の心の中の下絵に合った風景だけを取捨選択して句にしていた」（角川「俳句」二〇一八二）などの別観点の読みが提示され、単純な二項対立を超えてられています。

鰯雲人に告ぐべきことならず 加藤楸邨「寒雷」

山本健吉「季語と主観的感概との強引な衝撃」「現代俳句」平井照敏「詩的な想念を強くもりこみながら、謎をとどめた、稀な例」沈黙の塔

高柳重信「一般的でありますながら同時に個人的な日常次元の單なる感懷を、平板に叙述するだけで、それを一回的な表現の次元に高めるため、作家としての独自な自己限定が、わずかに〔鰯雲〕（中略）という季語のみにとどまっている、これらの俳句構造の単純な脆弱さを、少しく批判したことがあった」『バルの塔』

現実世界の手触りを基盤にするか、言葉の自律性を重んじるかの差異が重信とそれ以外にはあります。

彎曲し火傷し爆心地のマラソン

金子兜太

金子兜太・中村草田男の角川「俳句」における往復書簡にて、草田男が兜太句を添削しています。貴君の場合は、十七音詩たらしめるための、機構の不備、有機性の欠如から直ちに破綻が生じてきているといわざるを得ま

せん。(中略)

### 彎曲し火傷し爆心地のマラソン

若し、私が、この作品の難解性を緩和し、より達意のものたらしめようとすれば、甚だ失礼ですが、さしづめ次のようにでも表現するでしよう。

爛れて撲れて爆心當てなきマラソン群

(中村草田男全集 9) より)

草田男は元句が「念頭操作」により「徒らに派手」であること、表現が粗雑であること、季語の有機性の考慮のなさを問題にしています。草田男・兜太の一往復において最も強調されたのは季語に関する立ち位置の差異、たったが、マラソンの句の添削前と後の比較、そして元句が歴史に残つたことについて、もう少し議論されてもいい気がします。

### 一月の川一月の谷の中

長谷川櫂はこの句を激賞します。

飯田龍太『春の道』

「もし」「この句がピンとこない」という人がいれば、自分の俳句には俳句を読む力と詠む力が果たしてあるのか、あらためて根本から考え直したほうがよろしい」(董振華『語りたい龍太伝えたる龍太 20人の証言』(コールサック、二〇二四))。この後長谷川は「一月の川」の句の良さを「単純明快」「壮大な空間が幽玄の世界に続いている」「普通の世界を詠んでいる」の三点だと指摘します。

筑紫磐井は同じ肯定評価でもかなり観点が異なり、対句的複表現法が龍太の表現にいかに多用されている表現であるか汎用的に例証豊かに述べた後、龍太の文体的特徴を「月並」とい

う言葉で要約しています。(林桂「詩学」一九九四・八『俳壇時評「飯田龍太の彼方へ」の彼方』)

二人の論を踏まえて、黒岩としては、「一句成立を支えていふ他の要素として「谷」の持つ外界から取り残された厳しさ、下降のイメージ」を指摘しておきたいです。龍太や櫂が重視した「無名」「普通」を感じるためには、基盤となる体験が必要であり、作者と鑑賞者の間の様々な体験ギャップにより、良さが感じられないこともあるのではないでしようか。

今後の展望として、ここまで見てきた「両極」の例が、果たして平成・令和以降の俳句検証に益するかを考察したいと思います。

青木亮人は「俳句の変革者」(二〇一七、NHKテキスト)で次のように述べています。

一九八〇年代から二〇一〇年代に至る現今俳句界は、俳句史上、最も「平均値」の高い句が詠まれ続けているかに感じられます。(中略) 各流派や系譜、俳句史の流れとも無関係に、自身の好みに従つて、厖大なデータベースから、フラット情報として掘み出し、魔法のように自在に「うまい句」を吐き出しうる。これは作者本人がそのように自覚したというより、もはや加藤楸邨のように「大きくて野暮」な何かで勝負する時代でなくなつた、ということです。

「大きくて野暮」が再興している気配は見られないが、「うまい句」に対しての意識については変容があります。俳壇に眠っている若手の作品を総合誌・結社誌・同人誌・インターネットで掘り尽くしたいと思います。

## あけぼの集

さよならに余韻の残る霜夜かなさいたま 青木 鶴城  
黎明の明 石海峡神の旅 八王子 青木 隆  
戦争ははじまらないはじめるのだ齋 八王子 赤野 四羽  
鱗雲まだまだ未来広ごりぬ国分寺秋山ふみ子  
腰痛永し色なき風を驚撃む多 摩足立喜美子  
ファーストシューズの追ひかけてゆく鰯雲 小 平安達 昌代  
横顔の表情読めず夕時雨清瀬穴原 達治  
てのひらに昭和の匂ひなあられ稻 城新井 温子  
老と云ふ孤独と氣儘花野道八王子荒川勢津子  
大根や刃の透き具合考察す町 田有坂 花野  
人は皆銀河の記憶持ち生る柏 江有原 雅香  
初東風をまといて里の宅急便国分寺安西 篤  
八つ当たりしそうな貌の螽斯足 立飯田 和子  
春光や生きられるまで生きてみる 東久留米 飯田 玉記  
右足の小指骨折年詰る多 摩石川 春兎  
小夜時雨小石のように君は逝き小 平石橋いりり  
木の葉一枚歳時記の栞とす青 梅一ノ瀬順子

手先から透け出しそうな朝寒し日 野一関なつみ  
ゆつたりと年賀状仕舞ひの音を聞く泊 江伊東 類  
放埒の果ての有りやう枯蓮町 田稻吉 豊  
一本の鶏頭の緋が胸を去らず武藏野江中 真弓  
天日にんげんをそぞうしなおしてください府 中大井 恒行  
梶は平和の盛りすぎてゐる府 中大石 雄鬼  
冬銀河既に無いかもあの星も多 摩大石 ゆめ  
落葉雨庭と裏山混然と日 野大槻 正茂  
どんどん焼き心の飾りもひつくるめ川 崎大西 恵  
寒犬や夜更に超ゆる蒲田川三 鷹大森 敦夫  
「ハンガリー舞曲」嬌嬌アジア冬入り日昭 島岡崎たかね  
黄落や府中刑務所大看板三 鷹小川 葉子  
稻架掛けや鴉が西の空見てる川 崎尾崎 太郎  
雪霏霏と錦の酸ヶ湯モノクロへ昭 島尾関 英正  
落書きや桂落葉の底の底 青梅小野こうふう

## あけぼの集

電柱の首を取つたり寒鴉立	川花	栄	鰻重を待つ間のスマホ禁止令昭	島坂本	空
偏屈のごとき花梨の実を愛す立	川片倉みちこ		この頃や西も東も冬紅葉小金井櫻さとみ		
老いの身に一泡ふかせ初時雨昭	島亀津ひのとり		小鳥来る真澄の空をまつすぐには東久留米佐々木克子		
今年の漢字は「熊」とは熊知らず熊	谷金子うさぎ		キスをするラストシーンに散紅葉府中笹木弘		
梅の香やお喋り夢中婆仲間西東京河	順子		投句する切手はムーミン鳥渡る府中佐藤栄子		
蜩の久遠に響く谷地田なり立川川島	一夫		人らみな魚の裔なり月仰ぐ調布佐藤茉		
振り向けば一瞬の秋冬帽子清瀬神崎	幸子		深大寺三時は紅葉降る時間昭島佐藤光子		
たんぽぽの絮吹き老後はぐらかす小平城内	明子		片隅は落ち着くところ冬の蜘蛛杉並島彩可		
一筋の湯気立つ頭寒稽古大田	小泉満知子		ふつぶつと豆腐煮え花滋味を喰う足利清水弘一		
新米も古古米もみな地の恵み三鷹高坂	榮子		青蜜柑リレー走者でありしころ世田谷鈴木浮葉		
少し濃くなる人間関係十二月西東京幸村	睦子		奥多摩の紅葉は如何に熊ニユース立川鈴木かずえ		
一茶忌の蠟石で描く観覧車小平後藤	行雄		友来たるシルバーカーに柿乗せて小平鈴木寿江		
いくたびも紙漉くように平和かな府中小林	育子		君先頭しんがりは恐竜あきのみち小金井鈴木佑子		
冬灯神田書肆街カレーの香あきる野小林マリ子			小鳥来るアトリエの窓全開に板橋諏訪部典子		
墜ちてなおつややか冬の雀蜂町田小山健介			投函のポストと並ぶ金木犀小平関梓		
A Iのハルシネーションうそ寒し立川齋木和俊			目礼しすれ違う女冬の蝶小平高瀬多佳子		
路地裏に一六銀行一葉忌多摩齊田仁			秋の夜昭和の翳をまとひけり西東京高原桐		

## あけぼの集

小鳥来るけふより喜寿に向ふかな清	瀬谷村	鯛夢
豆電球ほどのしあわせ星月夜国分寺玉井	豊	薔薇だ薔薇前に彼方に色一杯稻城玉木
しりとりの終りは「ん」よ寒の木瓜日野玉木	祐	石蕗の花生意気になる一年生立川田村
寒月や神官に遭ふ帰り道三鷹田山光起	明通	古日記スプレー一杯分の悔武藏野津久井紀代
未練未練棺の蓋が閉まるまで八王子辻升人	千恵	辛くとも行かねばならぬ私の細道八王子辻丕子
惜命忌紅葉散らして過ぎにけり清瀬寺島茉美子	智治	空き箱に空き箱重ね十二月八王子沼田博古
終日を老人でいる敬老日西東京戸川晟	裕子	大根引く多摩丘陵を見渡して三鷹根岸裕子
爪切るも介護の一つ秋日和杉並飛永百合子	敏三	小春日やデフリンピックの切手貼る三鷹根岸博古
捨てられぬ古いミシンと年を越す清瀬永井潮	操	窓際のポインセチアにある平和小平野口佐稔
酷き世を幾年木の葉降りしきる立川中條啓子	正則	寒波急顔認証のやりなほし羽村野島正則
昭和史の大半生きて日向ぼこ西東京中田とも子	葵	木枯や眼下に秩父光り合う青梅萩原美沙
断りの端でつまづき秋暑し座間長野保代	和之	ボロ市の鉄腕アトム頷きぬ八王子平山葵
御旅所に兜太のよぎる秩父祭武蔵野夏目重美	喬	見はるかす白富士東都畏まる八王子広井和之

町に出て熊の親子の帰る場所町田成戸寿彦  
深入りはせずに相槌海鼠食む国分寺南行ひかる  
雪舞ふや檜皮の千木の神さびて西東京西川五月  
返り花夜更けのふとき救急音世田谷西前千恵  
月の舟堅田を遠くすぎゆけり昭島西村智治  
紅葉の渓谷大河となり海へ三鷹抜山裕子  
空き箱に空き箱重ね十二月八王子沼田博古  
大根引く多摩丘陵を見渡して三鷹根岸裕子  
小春日やデフリンピックの切手貼る三鷹根岸博古  
窓際のポインセチアにある平和小平野口佐稔  
寒波急顔認証のやりなほし羽村野島正則  
木枯や眼下に秩父光り合う青梅萩原美沙  
ボロ市の鉄腕アトム頷きぬ八王子平山葵  
見はるかす白富士東都畏まる八王子広井和之  
埋火や燃す文殻に失せぬもの練馬淵田芥門  
枯れてゆくものに加わり枯葉踏む八王子冬木喬

## あけぼの集

声となるまで空の色十二月国 立前田 弘  
うつかりをぶらさげながら落葉踏む 国 立前田 光枝  
鳥啼くやふりみふらずみ朝時雨 国分寺 松井 彰穂  
心にはまだ父母が居て冬ぬくし八王子 松元 峯子  
人間に生まれたキセキ臘月 東久留米 三池 泉  
愛犬のぬくもり欲しい立冬よ 東久留米 三池しみず  
望郷や夕陽に光る木守柿 小金井 三浦 長閑  
パスワード変えて枯野へ歩き出す世田谷 三浦 文子  
年齢だからは御法度花茨剪る町 田 三木 殷柳生 正名  
手袋やつないだ手と手ランドセル 東大和水落 清子  
呱呱の声すなはち年の改まる 三 鷹水野 星闇  
菊人形とふ柏花のごときもの日 野満田 光生 中山本 徳子  
星なき夜熊よりも身を寄せ合はず 小 平見原万智子 壞れゆく妻看取る友の霜月かな多 摩山本みつし  
ふらここに八十路の重さ揺らしめる昭 島宮腰 秀子 りんご剥く切目の増える誕生日府 田山崎せつ子  
やまいだれの散らかるわが家大掃除調 布宮崎 斗士 胡後より冬日を浴びて歩きたる町 田山崎せつ子  
御帰宅の猫のしつぽに露ひかる国分寺 武藤 幹 故に我在りジー・パンといふ穴の中三 鷹柳生 正名  
何の因果か耳石動きぬ花八手 小金井村井 一枝 背後より冬日を浴びて歩きたる町 田山崎せつ子  
芙蓉から子供飛び出しかくれんぼ立 川村松 泉  
びいどろの風や荒野の渡り蝶岐 阜村山 恭子  
中年の明るさ榎樺の実のたわわ熱 海望月 哲士  
干柿のひとつひとつが持つ疼き東村山 森本由美子  
かりん手に雲の凝固を見ていたり三 鷹守谷 茂泰  
故に我在りジー・パンといふ穴の中三 鷹柳生 正名  
背後より冬日を浴びて歩きたる町 田山崎せつ子  
りんご剥く切目の増える誕生日府 田山崎せつ子  
おたがいの無事を確かめ年賀かな調 布豊 宣光  
おたがいの無事を確かめ年賀かな調 布豊 宣光  
壊れゆく妻看取る友の霜月かな多 摩山本みつし  
おたがいの無事を確かめ年賀かな調 布豊 宣光  
浮きそうな膝を抱えて後の月稻 城好井 由江  
虚空視る百舌よ私も暮れていく三 鷹吉川 真実  
テレビからミサイル発射栗墜ちる 東久留米 吉平たもつ  
萩ゆるる女ごころのしなやかさ町 田米倉 信山  
年齢を重ねる至福かぶら汁立 川米澤 久子  
熊いかに西村山郡朝日町小 平我妻 民雄  
末席に天才がいる初句会青 梅渡部 洋一

青木 隆

新井 温子

飯田 玉記

太陽系抜け出て須弥山秋の風

望月 哲士

八月の飛行機雲がまだ消えず

好井 由江

ひとり住む卒寿の母や鰯雲

小野こうふう

太陽系抜け出てとはいから現代的な言葉であるが、その先に須弥山という仏教の世界の中心に聳え立つ高山がくるとは驚きであった。悟りを開けば須弥山を見ることができるのかもしれない。どんな景色なのだろうか。

赤野 四羽

「銀漢の彼方に居る」と考妣より

有原 雅香

私には見えない私天の川

中田とも子

石川 春児

この句を見た時、作者の意図とは違うかもしれませんと思いつつ、マリアナ諸島の一つテニアン島を思い出していた。サイパン島の隣にあるテニアン島は、戦時中B29が日本に向けて飛び立った島だからである。私の祖父母達はサイパン島に今も眠る。

一人暮らしのお母様を案じての句。丈夫。歳の老い方はそれぞれお母様は心と体の機能をしっかりと保ち自由な生活を愉しんでいるのでは。今のまま数えきれない鱗ほどにもつともつと長寿で居らして下さい。

裏拍で加はる夕焼のセッション  
安達 昌代

裏拍は、ジャズやブルースのスイング感に欠かせない。絶妙なズレの感覚に、無限の奥深さが潜んでいる。一日が裏返つて夜を迎える夕方は、まさに裏拍の時間だ。夕焼の太陽が地球のリズムを奏でる。人間と世界がセッションしているような一句だ。

仕事と家庭以外も団栗とかあるよ  
赤野 四羽

有坂 花野  
成戸 寿彦

先ず一度拒否してみたい茄子の花  
岩佐ひすい  
玉井 豊

父母はもとより夫も他界しました。姿は見えませんが、遙かよりの大きな慈愛に守られて日常を過ごすことが出来ます。

なぜ「天の川」の季語なのだろうかと考えた。作者は天の川を仰いでいるが、その前に誰かの面影を見ているのでは。いつも自分を肯定してくれる人がいたのに、今はいない。「私には見えない私」の表現に不安な心情が読み取れる。

何とも心優しい人生の応援歌である。暗喻としての「团栗」が象徴するのは、目覚ましく何かの役に立つわけではないが、素朴で愛らしく掌の中温めていたいような大切なものの、といった辺りだろうか。確かにこれも生きてゆく為の必需品に違いない。

「未知の老い」にはつとさせられました。なんと辽闊に生きているものか、ただかつて経験したことの無いこのはがゆさ、これが「老」というものだったのか。食べたいものを好きなだけ食べると大見得を切つて大根を刻めば、指迄刻んでしまう哀しさ。

「親の意見と茄子の花は万に一つの狂いなし」との格言を聞き親や年長者の意見を一度は拒否したいと思う作者と共に鳴しました。私自身若い頃、何だかんだと反発していたものの結局親の意見を無視出来なかつた自分の気持ちを代弁してくれた一句です。

大石 ゆめ

岡崎たかね

佐々木克子

私は見えない私天の川

中田とも子

あくせく余裕のない日々、夜空を見上げ  
星を探すことも忘れていたのに。そうか、  
自分が自分であることも忘れていたのか  
も。天の川さん、私はどう見えますか。

新月の沖から空母来る日本

吉平たもつ

日本では12月20日が新月。そのとり合わ  
せが空母とは。原子弹エンジンで核兵器搭  
載の爆撃機が次々と発進して行く。クイズ  
「防衛装備品の移動」を四字熟語で――  
○○○又は○○輸入。科学の光明は人類の  
幸のために。宇宙の伝説も語り継ぎたい。

大槻 正茂

八月の飛行機雲がまだ消えず

好井 由江

飛行機雲そのものは大空にある人間のつ  
けた足跡のようなものですが見た者的心を  
動かします。八月は広島、長崎の原爆の月  
です。難しい言葉を使わず、写生句のよう  
な句ですが印象深い俳句になっています。  
下五の「まだ消えず」がとてもいいです。

大西 恵

星月夜ばくら生命樹の途中

広井 和之

生命の源、成長、繋がり、永遠性などの  
根源的なテーマを表す象徴とされる生命  
樹。星月夜を見上げていて生命樹になる途  
中の「ぼくら」。星月夜と生命樹といつた  
壮大なものと「ぼくら」との見事な対比に  
感嘆した。

後藤 行雄

藻の花やどこかには効く痛み止

一関なつみ

この何年か、肩、首、膝と痛みがある。  
痛みは、不安なものだ。漢方を煮だして飲  
む。この句の、どこかには効く、に慰めら  
れる。藻の花の季語に、滞った血流がさら  
さらと流れ出す効能があるようだ。

笛木 弘

もらわれてすぐまわりだすメダカの子

幸村 隆子

おそらく子供が誰から貰つて来たのだ  
ろう。早速、小さな水槽の中に水を入れて、  
貰つて来たメダカの子をいた。すると、  
何ごとも無かつたように元気に泳ぎだした。  
何故か嬉しいような気分になつてくる。ひ  
らがなの表記も句を優しくさせている。

櫻 さどみ

玉井 豊

炎帝に荼毘に付される地球ごと

石川 春兎

今年の夏は暑かつた。自分も何か句に出  
来ないものかと挑んだがペンが走らず残念  
だつた。炎帝を持って来た処に、この句の大  
きさ、暑さの厳しさがある。自然には逆  
られないが。地球温暖化には今さらではあ  
るが、一人一人が出来る事から始めたい。

差す手より引く手かなしや風の盆  
風の盆ではありませんが、私の故郷秋田  
にも西馬音内の盆踊りという有名な踊りが  
あります。姉の嫁ぎ先で何回か見たことが  
あります。何ともいえない優雅な踊りで、  
特異な衣装を着て街中を一晩中踊り歩く、  
差す手引く手の優雅さはそれは見事です。

安西 寛

鈴木 浮葉

関 桢

夏目 重美

ごはん粒で封じた記憶遠花火

佐藤 茉

夏草や少し弱気に生きた僕

青木 鶴城

メガソーラー別れ鳥の発ちし後

大森 敦夫

確かにごはん粒二、三粒伸ばして封筒に封をしました。糊ましてやステック糊など身近にありませんでした。花火や夜店その程度のイベントにも、中々連れて行つてはもらえなかつたようだ。でも子供時代は、不思議さに満ち満ちていました。

鈴木 寿江

玉木 康博

成戸 寿彦

私は日々色々な選択を認められ生きています。長い一生を恙無く歩むには自分の立ち位置を控え目に置くことが肝要と。豊かな人生を歩いておられる作者の姿が浮かびます。季語の夏草が美しく響いています。

別れ鳥は独立立ちさせる我が子を追い出します。親鳥と子鳥の別れの儀式である。人間臭い季語である。鳥の山は黒く冷たく光る発電設備の山へと変わった。人間と自然の在り方を問う警鐘の一句となつた。

煮凝りや合点のゆかぬ事ばかり

城内 明子

母許へづづくこの道白木樺

秋山 ふみ子

足立 喜美子

昨日今日と一日一日老いていきます。バッグに入れたと思った物が入っていなかつたり、ちょっと置いたものが見つかなくなつたり、そんな合点のいかない事が多くなりました。煮凝りの様に溶けてしまったい…。でも、もう少し俳句等々頑張ります。

木槿は夏から秋にかけて次々と新しい花を咲かせ続ける生命力から、新しい美や信念という花言葉があります。「この道」は意思を持つた道だと思います。しかも、「白」は純粹を表現しており、実景の句としても、きりっとした調べになつています。

諏訪部典子

余生という廊下に立ち止まる良夜

宮崎 斗士

中田とも子

南行ひかる

ブーチンの貌向日葵の背後から

足立 喜美子

大空にぽつかりと浮かんだ満月は本当に美しい。作者は、その満月が二つ並んでいたらと思つた。更に、三つ並んだら、四つ並んだらと思いを進め、五つ並んだらと思つた時には恐ろしくなつてしまつたのでしよう。一つだから美しいのです。

そうなんです！ 余生のない人が多かつたその昔、廊下には「戦争」が立つていたのです。平和な現在なればこそ「良夜」が立ち止まれる幸せを改めて思い起しました。

花鳥風月も良いがこの様な句にも大きいに共鳴。発想の独創性と内容の深さに驚嘆。かの戦争はどう考へても侵略。句中の漢字は顔でなく貌が相応しい。そしてそれは他人事では無い！ 今日日本は、人、物、技術、国土を略奪する国に包囲されているから。

西前 千恵

根岸 敏三

萩原 芙沙

追いかけ祭り阿呆となりにけり

櫻 さとみ

「踊る阿呆を見る阿呆、同じ阿呆なら踊らなそんそん」と故郷徳島の阿波踊りを思い出し、子供の頃御近所の人達と少人数ながら歌い踊ったこと懐かしく思い出しました。追いかけて祭りを楽しむお気持一杯ですね。私ももう一度阿呆になりたいです。

傘置むやうに八月終りけり

津久井紀代

西村 智治

薬持つ米寿と喜寿や秋の旅

飯田 玉記

掲句は私も実感している。薬箱には曜日ごとに薬を仕分けして、飲み忘れないようにしている。旅行となれば旅の日数に合わせた薬を旅行鞄に入れる。旅行に行かれるお二人に乾杯です。「米寿と喜寿や」と並べて言つたところに旅の期待感が出ている。

仕事と家庭以外も団栗とかあるよ

赤野 四羽

根岸 操

こんなにも暇な時間のある猛暑

宮腰 秀子

私が達が暮らす地球。温暖化が年々進み、猛暑の中では何かをやろうとする気力さえ失してしまい、外出も儘ならない暇な時間が有り過ぎて、退屈している様をこのよう

に捉えた表現力に感服いたしました。若かりし日の宮腰様が浮かびました。

傘置むやうに八月終りけり

津久井紀代

平井 葵

こんなにも暇な時間のある猛暑

宮腰 秀子

今年の夏もひどいものだったが、八月といふと、それに戦さのむごさが加わる。それが、あつけらかんと終つたというのだろう。一つの雨の終りと、八月というものの終りと、その二つの終りを、傘置むと、作者は、うまく表現しきつたようだ。

抜山 裕子

差す手より引く手かなしや風の盆

安西 篤

野口 佐稔

差す手より引く手かなしや風の盆

安西 篤

満田 光生

この御句にへたに鑑賞文など書けません。胸に抱き寄せた風の中に、あの人への、彼の人の姿が甦り、耳許で声が囁きかけてくる。哀しくも懐かしい風の盆。

人生の大切なものを俳句的に提示。仕事も家庭も大事だけど、人生つてそれだけじゃないよ、って言って出てきたのが団栗。一瞬「えつ」と思うが、やがて「そうだなあ」と納得。「団栗とか」で広がる想像がとてもいい。拍手です。

風の盆の「越中おわら節」の囃子は哀調を帯びるが、作者は手の動きを「かなし」と感じた。勇壮な男踊りも優雅な女踊りも、手を引く動作により哀しさを感じるという感覺が繊細。踊り手は二十五歳まで。若さが却つて「かなし」さを感じさせるのか。

### 三池しみず

万緑や吸い込まれゆく地域バス

飛永百合子

地域バスを吸い込むように緑がいつぱいの美しい光景。「吸い込む」の表現が素晴らしいです。路線バスの廃止や減便のニュースを聞きますが、バスは大切な交通手段です。運転手さんの優しい心配りいつも感謝している私です。

望月 哲士

差す手より引く手かなしや風の盆

安西 篤

「風の盆」は、越中おわら節の哀切に満ちた旋律と浴衣等で菅笠を被る踊の姿が流麗で情趣に富んでいるので、観光化されてしまう。元々は祖靈を祀る行事で、その悲しみを踊りの手の動作を捉えて表現され、しかもそれを平仮名で表したところに感銘。

山本 徳子

羽抜鶴体力はなく気力のみ

根岸 操

古刹の景であろうか。見るからに躰は細つてみえる。それでも、らんらんとしている目もとは氣力があふれている様に見える。生きるとは、その氣力が大事なのでありますよう。

米澤 久子

### あけぼの便り

「おはよう」と今朝も隣家の朝顔に

大概 正茂

マンションのベランダですね。お隣さん丹精の朝顔に「おはよう」「きれいだよ」と、「今朝も」早起きをして声を掛けている優しい作者の姿が想像できます。爽やかな一日の始まりです。簡潔で気持の良い俳句に魅かれました。

渡部 洋一

ひとり住む卒寿の母や鱗雲

小野こうふう

故郷でひとり住むお母さんは卒寿になられお元気のご様子。「子供には心配をかけたくない」「自分の葬式代は自分で備えておきたい」母、お互い迷惑を掛けないようにならへんのです。鱗雲を静かに仰ぎながら…。

### ★鑑賞文についてお願ひ

一句鑑賞文の執筆ありがとうございま

す。  
ご依頼の書面でもお願いしてあります  
が、玉稿の分量は六行以内に収めて下さる  
ようご配慮をお願いいたします。(編集部)

○戸川辰様、前号で拙句のご鑑賞を賜り有難うございました。介護と看取りは「年の順」が落ちつきどころではと思いま  
りがとうございました。(佐々木克子)  
(関 桦)

○医師も世代交代の世。入院経験の多い私は不安が多く、手作業も言葉も不足に思つてこの頃です。せめて俳句や文芸作品

○淵田芥門様、拙句への鑑賞ありがとうございました。(青木 隆)

○紅葉の季節になりました。いつもの散策の道に桜の紅葉や満天星つづじの紅葉を楽しんでいます。

○よろしくお願ひいたします。  
○いつもながら、お手数をお掛けします。  
よろしくお願いします。(河 順子)

○西前千恵様、拙句を御鑑賞下さり有難うございました。嬉しく拝しました。私こそ日々に物忘れの増えて情けない思いをしております。(城内 明子)

○もう少し俳句をたのしみながら作句で書きればと思う日々です。来年も「楽しみながら作句を」が今の目標です。我妻民雄様、前号にて私の句にご講評くださいありがとうございました。(佐々木克子)

は自分の手で書きたい。筆で書けたら尚よいと願っています。

(高原 桐)

○前回の「あけぼの」では、猛暑残暑のねぎらいがありましたのに。もうお寒うございますになりました。沸騰する地球という句もありましたが、さすがに十一月も末になり北は雪の便り。幹事の皆様何時も大変お世話様です。感謝申し上げます。もうしばらく何とか頑張ります。よろしくお願ひ致します。

(玉木 祐)

○したり、されたり、老々介護の日々です。また一年良い年にしたいです。

(飛永百合子)

○四季の国、日本ですよね！ 秋は何処へ？ 酷暑から、いきなり冬に入つた感じです。そう遠くなき将来二季の国になるのは…。当たらない事を願います。

(水落 清子)

○寝切りの主人の介護の日々。正に老々介護です。厳しいです。(中田とも子)

(成戸 寿彦)

○俳句大会において石橋いろいろ先生より拙句「山の宿敬語のゆるみゆく炉端」を特選にお選び下さり賞品まで頂きました。

先生の俳号に助けられたかもしれません。兜太先生の句のある袋、大切に使わせていただきます。ありがとうございました。

(満田 光生)

○暑い暑いといつていたのも、ついこの前

だと思うのに秋をとばし今度は寒い寒い冬です。体の方がなかなかついていけません。

(西前 千恵)

○いつもありがとうございます。よろしくお願いいたします。

(松井 彰穂)

○三池泉様、拙句をとり上げて頂きありがとうございました。元気を頂きました。

(宮腰 秀子)

○永井潮様、田山光起様、小川紅子様、一句鑑賞にとりあげていただき有難うございました。

(三池 しみず)

○「二季」になるのでは？ などと聞くと

俳句はどうなるのかしらと心配したり、なるようになると開き直つたりの昨日です。編集の皆様お世話になります。

(高原 桐)

○冬は冬眠して姿を見せないはずの「熊」が冬の季語とされるのは歳時記の謎の一つでした。が、昨今はそうも言えません。

(中田とも子)

(成戸 寿彦)

私の郷里では一昨年年末、帰宅したら炬燵に熊が頭を突っ込んでいた、という事件がありました。最近は、市内で一番大きな病院の近所にも出没。出没は通年なので、もう「熊」は無季です。炭焼き・柴刈り等の山仕事を捨てた人間への報いでしようか。

(満田 光生)

(成戸 寿彦)

現代俳句協会の第六十二回現代俳句全国大会の表彰式が十一月三日、東京上野の東天紅で開催されました。令和七年度同大会へ全国からの応募総数一万三千余句の中で

(成戸 寿彦)

が最高賞の現代俳句全国大会賞を獲得しました。おめでとうございます。

(成戸 寿彦)

またこの作品は特別選者中村和弘、久保

(成戸 寿彦)

純夫両氏の特選句にも選ばれました。

(成戸 寿彦)

○十月初旬、石橋いろいろ様から投句をお勧

めいたときました。その際、月末〆切できれば冬の季語と承ったと記憶いたしました。

(見原万智子)

○今年の猛暑もなんとかのりこえ、やつと秋と思つていたら急に冬めいてきました。どうぞ編集の皆様、無理せずよろしくお願ひいたします。

(宮腰 秀子)

○「猛暑の地球どこにおわすか龍田姫」こんな愚生の一句もあり。秋の喪失。急な冬…。皆様、お身体お大切に!!

(武藤 幹)

## 全国大会賞に満田光生さん

現代俳句協会の第六十二回現代俳句全国大会の表彰式が十一月三日、東京上野の東天紅で開催されました。令和七年度同大会

へ全国からの応募総数一万三千余句の中で

蟲の脚刺さつてみたる網戸かな

(満田 光生)

(成戸 寿彦)

が最高賞の現代俳句全国大会賞を獲得しました。おめでとうございます。

(成戸 寿彦)

またこの作品は特別選者中村和弘、久保

(成戸 寿彦)

純夫両氏の特選句にも選ばれました。

(成戸 寿彦)





## 府中市郷土の森 秋の吟行会

十一月一日、三連休の初日に多摩地区現代俳句協会の秋の吟行会が行われました。前日の雨も上がり肌寒くはありました。

が、上々の吟行日和となりました。府中市郷土の森は今まで何度も多摩地区現代俳句協会でも訪れている吟行地です。

広大な敷地に武藏野の地形をいかし、様々な樹木や草花が植えられて、四季折々訪れる人々を楽しませてくれます。又、明治、大正、昭和などの古い建造物も復元され、府中の歴史等も知ることができます。

集合は十時半に博物館前、参加者は十三名でした。点呼の後、銘々が府中市郷土の森へと散策を始めました。

晚秋とはいえ、昨今の天候不順により紅葉や落葉もまだでしたが、それなりの風情がありました。昨夜の雨の名残りで樹木や草々もしつとりと濡れ、しじみ蝶や黄色い蝶も飛び交って目を楽しませてくれます。ハケ下を流れる水の音もひときわ強く耳に残りました。

句会場は郷土の森博物館の一階会議室で二句投句、五句選です。句会は一時半より開始されました。人数は十三名とやや少數でしたが、その分句評や鑑賞を話す時間は

たっぷりとあり、とても充実した句会となつたと思います。高得点句七位までの方に水野会長より賞品が手渡されました。その後例の写真撮影が行われ和氣あいあいの内に閉会となりました。

当日新たに参加された二名の方は、当吟行地の近くにお住まいとか。府中市郷土の森の話を色々して下さりとても有難かったです。お礼を申し上げます。

(秋山ふみ子記)

### 秋の吟行会作品

〈上位入選七句〉

飛石を伝ふ子につく秋の蝶 水野 星闇

あぶれ蚊や木造校舎ひとめぐり 秋山ふみ子

手が胸にとけつ秋の馬頭観音 大石 雄鬼

古民家へ水音聞きつつ辿る秋 米山多賀子

秋思ふと茅葺き屋根の薄もみぢ 三浦 長閑

花の木の名札のみなる十一月 広井 和之

石組みの井戸の底には隕石きしむ

森本由美子

〈一人一句〉

平右衛門の懷抜ける秋の風 島崎 栄子

珪化木幾千万の秋を経て 尾崎 太郎

新藁を嗅ぐ父の胸広きかな 根岸 操

冬日受け床黒光りの町役場 根岸 敏三

まいまいづ早くも枯葉落ちるかな 玉木 康博

吟行会全員

枯れ枝のバイオネストに小春風 石橋いろり



# 第43回東京多摩地区現代俳句協会俳句大会

十月十三日快晴のスポーツの日、初めて大会会場となつた立川市子ども未来センターに四二名が参加。一時半から満田光生幹事の司会で開始。会歌「多摩のあけばの」を全員で齊唱。小山健介氏の開会の言葉では、会歌の由来を紹介。水野星闇会長の挨拶では、「多摩地区は全国の中でも長い歴史を持つている。六五四句、一三〇名の投句があり、全員による選句は多摩地区の特徴だ」と話された。ご来賓の羽村美和子千葉県協会会長、平田薰神奈県協副会長、瀬藤芳郎東京都区協副幹事長より挨拶をいただいた。

続いて、黒岩徳将現俳協青年部長の「俳句の両極（今私たちは何を考えるべきか）」と題する講演。「個々人が俳句について思うことを意見交換し合う。その行く先に、個々の俳人の凝縮された俳句観のぶつかり合い、俳句の『両極』がある。」「今私が最も俳句に足りていないと思う『一句の肯定評と否定評の共存』の例を挙げる。強く反発し合うことは新たなエネルギーを産む。」とする。例えば、高野素十の〈甘草の芽のとびとびの

ひとならび〉について、虚子と水原秋櫻子の対立（「自然の真と文芸上の真」）を挙げる。加藤楸邨の〈鰯雲人に告ぐべきことならず〉について、高柳重信と山本健吉・平井照敏・鷹羽狩行との間に、現実世界の手触りを基盤にするか、言葉の自立性を重んじるかの差異を指摘する。金子兜太の〈彎曲し火傷し爆心地のマラン〉についての草田男の添削も紹介される。楸邨の鰯雲の句を青木亮人が「もはや『大きくて野暮』な何かで勝負する時代ではなくなった」と評したが、黒岩氏は「『大きくて野暮』が再興している気配は見られないが、『うまい句』に対しての意識については変容がある」とする。

俳句大会は、上位二〇名の入賞作品を発表。大会賞は原田洋子氏の〈逃げ水を追つて戻らぬガザの子ら〉。続いて、黒岩徳将、羽村美和子、平田薰、瀬藤芳郎、安西篤、前田弘、神野紗希、宮崎斗士、大井恒行の諸氏を始め二六名の大会選者による特選作品を発表。選者から講評。地区協報告と行事案内。根岸敏三幹事長の閉会の言葉。写真撮影。（広井和之記）



大会全員写真

## 第43回 俳句大会 入賞作品

平田 薫 選

カナンにもウクライナにも天の川 青木 隆

大井 恒行 選

無言館出てなお無言かなかなかな 戸川 岟

〈大会賞〉

逃水を追つて戻らぬガザの子ら

逃水を追つて戻らぬガザの子ら 原田 洋子

一心と無心は似たり蟬の鳴く 吉村春風子

瀬藤 芳郎 選 無言館出てなお無言かなかなかな 安西 篤 選

根岸 敏三 選 新茶から故郷自慢の花が咲き 齋木 和俊

逃水を追つて戻らぬガザの子ら

逃水を追つて戻らぬガザの子ら 戸川 岟

永井 潮 選 いちめんの青田は越の国を統ぶ 水野 星闇

前田 弘 選 夕端居空が明日へ届くまで 関口 ミツ

吉村春風子 選 石橋いろり 選 山の宿敬語のゆるみゆく炉端 成戸 寿彦

冬木 喬 選 まだ助走夏は本気を超えている 吉田 典子

B29を覚えているか向日葵よ 永井 潮

吉村春風子 選 逃水を追つて戻らぬガザの子ら 原田 洋子

永井 潮 選 逃水を追つて戻らぬガザの子ら 原田 洋子

三池 泉 選 太陽がすぐそこにある暑さかな 永井 潮

小山 健介 選 柿の花こぼるる音やガザ遠く 武田みどり

三浦 長閑 選 レコードにそつと針置く昭和の日 永井 潮

蓮見 徳郎 選 逃水を追つて戻らぬガザの子ら 原田 洋子

江中 真弓 選 落蝉の鳴き尽したる軽さかな 三浦 文子

大森 敦夫 選 逃水を追つて戻らぬガザの子ら 原田 洋子

永井 紀代 選 レコードにそつと針置く昭和の日 永井 潮

佐々木克子 選 どこよりか圈外となり枯野かな 西村 智治

大西 恵 選 桃むいて少し幸せ少し嘘 関戸 信治

やさしさを形にしたら吾亦紅 水落 清子

羽村美和子 選 浮いてこい残してあるよ君の下駄 吉田 典子

赤野 四羽 選 揚羽蝶ここがいちばん奥のはう 平田 薫

原田 洋子 選 八月の叫喚の貨車黙の貨車 安西 篤

ナルシストクラブ設立寒椿 羽村美和子

原田 洋子 選 八月のホースの捩れ解く水 栗原かつ代

宮崎 斗士 選 桃むいて少し幸せ少し嘘 関戸 信治

原田 洋子 選 八月のホースの捩れ解く水 栗原かつ代

神野紗希 選 やさしさを形にしたら吾亦紅 水落 清子

原田 洋子 選 浮いてこい残してあるよ君の下駄 吉田 典子

佐々木克子 選 揚羽蝶ここがいちばん奥のはう 平田 薫

原田 洋子 選 八月の叫喚の貨車黙の貨車 安西 篤

羽村美和子 選 桃むいて少し幸せ少し嘘 関戸 信治

原田 洋子 選 八月の叫喚の貨車黙の貨車 安西 篤

原田 洋子 選 桃むいて少し幸せ少し嘘 関戸 信治

原田 洋子 選 八月の叫喚の貨車黙の貨車 安西 篤

原田 洋子 選 桃むいて少し幸せ少し嘘 関戸 信治

原田 洋子 選 八月の叫喚の貨車黙の貨車 安西 篤

原田 洋子 選 桃むいて少し幸せ少し嘘 関戸 信治

原田 洋子 選 八月の叫喚の貨車黙の貨車 安西 篤

原田 洋子 選 桃むいて少し幸せ少し嘘 関戸 信治

原田 洋子 選 八月の叫喚の貨車黙の貨車 安西 篤

原田 洋子 選 桃むいて少し幸せ少し嘘 関戸 信治

原田 洋子 選 八月の叫喚の貨車黙の貨車 安西 篤

原田 洋子 選 桃むいて少し幸せ少し嘘 関戸 信治

原田 洋子 選 八月の叫喚の貨車黙の貨車 安西 篤

原田 洋子 選 桃むいて少し幸せ少し嘘 関戸 信治

原田 洋子 選 八月の叫喚の貨車黙の貨車 安西 篤

原田 洋子 選 桃むいて少し幸せ少し嘘 関戸 信治

原田 洋子 選 八月の叫喚の貨車黙の貨車 安西 篤

原田 洋子 選 桃むいて少し幸せ少し嘘 関戸 信治

原田 洋子 選 八月の叫喚の貨車黙の貨車 安西 篤

原田 洋子 選 桃むいて少し幸せ少し嘘 関戸 信治

原田 洋子 選 八月の叫喚の貨車黙の貨車 安西 篤

原田 洋子 選 桃むいて少し幸せ少し嘘 関戸 信治

原田 洋子 選 八月の叫喚の貨車黙の貨車 安西 篤

原田 洋子 選 桃むいて少し幸せ少し嘘 関戸 信治

原田 洋子 選 八月の叫喚の貨車黙の貨車 安西 篤

原田 洋子 選 桃むいて少し幸せ少し嘘 関戸 信治

原田 洋子 選 八月の叫喚の貨車黙の貨車 安西 篤

原田 洋子 選 桃むいて少し幸せ少し嘘 関戸 信治

〈大会選者の特選句〉

黒岩 徳将 選

八月の叫喚の貨車黙の貨車 安西 篤

羽村美和子 選

原田 洋子 選

原田 洋子 選

〈上位入賞句〉

落蝉の鳴き尽したる軽さかな 三浦 文子

肉球の先まで欠伸春隣 金子うさぎ

二股の大根ですが無実です 桑田 制三

ひとりにはできない人と枇杷を剥く 吉田 典子

レコードにそつと針置く昭和の日 永井 潮

無言館出てなお無言かなかなかな 三浦 文子

桃むいて少し幸せ少し嘘 関戸 信治

青葉験隙間だらけの記憶かな 川島由美子

原田 洋子 選



黒岩徳将先生による講評



二位入賞の三浦文子さんによる受賞者挨拶



水野星闇会長挨拶



石橋いりろ副会長による成績発表



司会の満田光生幹事



会歌齊唱



特選句披講の根岸操幹事（右）と秋山ふみ子幹事

## 事務局だより

○ 東京多摩地区の活動予定などはホームページからもご覧になります。句会の兼題もご確認いただけます。(永井・亀津幹事担当)
「現代俳句協会」から「東京多摩」へと進んでください。
★ 令和八年度定期総会
日時 令和8年3月20日(金・祝) 午後1時開場 午後1時30分開会
場所 立川市子ども未来センター 2F会議室 (JR中央線立川駅南口、徒歩13分)
★ 従来の陽春句会は取りやめ、出席者による持ち寄り句会を行います。事前投句はありません。(午後1時15分投句締切一句)
* 見原万智子(小平市) 金子うさぎ(熊谷市)
★会員の現況(12月末現在)
209名(正会員163名・一般会員46名) ☆新入会員 2名(敬称略) *印は正会員
◆ 多摩地区協へのご入会は、隨時受け付けております。現代俳句協会会員で多摩地区に在住の方は、会費は無料(新規入会の方は申し込み手続きが必要)。その他一般の方は年会費2千円です。お問合せ、ご連絡は事務局(下欄枠内)まで
「多摩のあけばの」編集担当幹事 青木 隆(満田 光生(光) 永井 潮(潮))

## 俳句研究会

◇◇◇◇◇ご案内◇◇◇◇◇

## 編集後記

第2回 2月21日(土)午後1時

立川市子ども未来センター  
(同じ込みはがきの地図参照)

電話042-529-8682

第3回 3月の俳句研究会は、定期総会と近接するため中止となりました

4月25日(土)午後1時

立川市子ども未来センター  
(兼題「萩若葉」或いは数字を詠み込む)

立川市子ども未来センター  
(5月23日(土)午後1時)

立川市子ども未来センター  
(兼題「晶子忌」或いはオノマトペ)

(いずれも会費千円、出句兼題を含む三句)

立川市子ども未来センター  
(いずれも会費千円、出句兼題を含む三句)

○初めての方、大いに歓迎いたします。見学も自由です。

地区会報発行回数の減について

会長 水野 星闇

一題字は三橋敏雄氏ー

会報『多摩のあけばの』は、長年にわたり年間四回の刊行を維持してきました。しかし、近年の諸物価高騰の影響もあり、会の収支は毎年に厳しさを増しています。加えて、編集体制も高齢化の影響が避けられず、人員の確保に苦慮する有様です。この為、今般、当会としては発行回数を年三回に減らさざるを得なくなりました。従来よりの掲載内容を維持し、更なる質の向上をめざして参りますので、何卒ご理解をお願いいたします。

多摩のあけばの

編集担当幹事  
青木 隆(満田 光生(光) 永井 潮(潮))

多摩のあけばの

印 刷 所  
TEL 042-620-2626

TEL 090-9389-4821  
E-mail hiremono@ybne.jp

株式会社 清水工房

☆あけばの集投句や一句鑑賞文寄稿を速達でいたく場合がありますが、一日二日を争う訳ではないので普通郵便で結構です。またFAXの宛先は 042-636-1227です。(隆) ☆現代俳句全国大会に出席して、青年の部受賞者のコメントに感心。みんな意識が高い。我々の句会には何故こういう若手が現れないのだろうかと、いたく考えさせられた。(光) ☆ふる里にも熊が出来て、庭には鹿が来るのが日常茶飯事だという。これまでにはあり得なかつたこと。地球が、世界が、日本もおかしくなってきている。一年の平穡無事を祈るばかり。☆昨年の選ばれた漢字は「熊」だった。夏の暑さと共に報道の話題で賑わった。投稿いただいた俳句にも散見される。でも、猛暑も熊の出没も困つたことだがこれからもずっと続くのではないか。天候は難しいが、熊とは知恵を出して何とか共生したい。(白)